

◆十二月の中ごろに、子供の居ない弟から、妻が台所で倒れ、救急搬送をして入院したと電話が入った。その後数日して、再起不能と告げられたと号泣する電話の弟をなぐさめる言葉もなく過ぎて、年末の二十九日、くも膜下出血で死亡の連絡で、一月三日通夜、四日に家族葬で行うことにした。年末年始で仏事は混み合っており不本意であったが何とか切り抜けることが出来た。又、四十九日葬は二月十五日であったが、お墓が福島市の信夫山の薬王寺なので山頂のため積雪があると車両は危険とのことで百ヶ日葬に変更となり、四月七日の埋葬で難題がようやく落着く結果を迎えるので安堵したところである。それから、母も、二人の叔母も七十九歳で他界。今年の八十歳の誕生日を過ぎて、やはりこの先は、諸事万端に難事が待ちかまえていることを考えると、今年をきつかけに、そろそろ終活を考えなくてはと、この一、二月を過ぎる間に決心の思いがはつきりしてきた。

池田桂一

◆年明けから晴天が続いている。朝八時頃になると部屋の中ほどまで陽が差してくるので、あわてて暖房を止めて、家猫のように陽を浴びながら仕事をしている。時間とともにかすかに動く光に、カーテンを閉めたり開けたりして加減していると、昼過ぎまでまぶしく陽は差しこんでくる。身も心も暖かくいられる日がいままで続くかと思いがながら、天気予報に耳をそばだてている。

市川茂子

◆米沢で一人暮らしをしている下の子は、余り来ない。車だと六時間はみなければ、という。いろいろな心配はあるが、雪のことをきく。一冬に一度くらい、NHKニュースに米沢が、それも市街地の雪降りが出る。雪が多いのに、車は走っている様子。聞いてみると、道幅が広いのだそう。冬には一車線が雪で使えないから、そうでないと困るようだ。年によって、億の単位で除雪費用を追加しなければならぬ、という。雪国で暮らしたことがないので、もっと聞きたいところ、大体に口が重く、雪も毎日となると話すこともないのかもしれない。

小野澤繁雄

◆今年も暖冬である。昔から正月に雪がない年は大雪にはならないと言われている。が、正月十日過ぎから毎日雪マークの予報が続いている。中国東北部から寒波が押し寄せてくると考えると、体にはあまりいい雪ではないような気がしてしまう。スノーダンプだの除雪機だの雪国ならではの出費が嵩む。雪国減税という制度でもあれば…だが、九州・沖縄の人からは台風減税でもという声が聞こえてきそうである。

神村ふじを

◆困っている。たまたまある本を読み出したら、メチャメチャ面白い。止まらない。日常がこのままだとストップする。本は池澤夏樹編集の日本文学全集・第八巻「日本霊異記」「宇治拾遺物語」その他の、作家三人による現代語訳。先週までこれらの古典に、私は知識も興味もなかった。翻訳とは横書き文章を縦書きに、あるいはその逆。条件は二つの言語と世界に熟達していること。単純な思いこみだった。言葉は化け物の森。まして古典の原作者も化け物。それなら訳者だって。メチャメチャの面白さもそこにあるのかも…。

河内愛子

◆昨年、晩秋の奥つがるの地を訪れた。昭和九年生まれの歌人の会の歌集研究会が行われたため、弘前の歌人たちとの交流も出来た。思いがけない歓待の数々を押しただくばかりであったが、太宰治の『津軽』の中の一節を思い出した。故郷の級友を訪ね、Sさんの家で受けた歓待ぶりに「津軽人の私でさえめんくらった」と述べている箇所である。ご案内頂いた随所で聞き及んだ津軽の伝説に興味を持った。早速、『津軽の伝説3』坂本吉加著（北方新社）を手に入れた。沢山の由来や伝説に、津軽伝説には日本人の本来の心の幹細胞が残っているとさえ思って読み継いでいる。

河村郁子

◆この冬は、次から次へと寒波に見舞われ続けていましたが、皆様には恙なくおすごしでしたでしょうか。暖冬になれていた身には、大変堪えております。それだけ年をとったということかもしれないと思っております。春が来るのを待ち遠しく思います。

谷垣満壽子

◆郷里山形に戻って三十五年になるが、この小正月、初めて「ヤハハエロ」（どんど焼き）作りに参加した。「ヤハハエロ」は地域の公民館が主催して盛大に行われている。まず、十一月に萱かやを刈って保管しておく。当日、中心部の田んぼに役員が集まって、約五メートルの竹を四本、天辺をまとめるようにして立てる。その中に、正月に使った松やお札、豆殻、藁、身拭き紙などを入れ、全体を萱で覆う。さらにその上をとば（藁で編んだもの）で巻いて、出来上がり。手際よく作る男たちに見とれてしまった。夕刻、皆が集い点火するのだ。父が老いて地域の役が私に回ってきたが故に知ったこと。もつと早くからわが地域の伝統行事に関心を持つべきだったと、悔やむことしきりである。

新野祐子

◆正月明け早々に、友人がころんで大腿骨だいたいこつを骨折し、入院した。独り暮らしで近くに親族もいないところから、ほかの友人たちと手分けして、入院・手術の保証、医師の説明を聞く、入院に必要なものを買いに走る、洗濯物を受け持つなどひどく忙しい思いをし、くたびれ果てた。だが心苦しそうにしている友人を見ると、疲れた顔も見せられず、頑張っている。

松井淑子

◆冬にかぎらないが、最近の天候不順にはついてゆけない。ことしは鳥取県の雪がすごい。現在は東京に住んでいるが、鳥取県出身の友達に電話をかけ、様子を聞いてみた。子供のころの記憶にも、ことしのような大雪は思い出せないと言っていた。それに、雪とは直接関係はないが、連絡をとり合うような知り合いも少なくなつて、ふるさとも遠くなつてしまったわ、とのことだった。

丸山弘子

◆4月から、ハルは新札幌駅に近い中学に通う。それを機に、私たちは新札幌に居を移すことにした。私は、流浪の民のような性質を持っているのだろうか。新しい街、新しい仕事、新しい住まい。二人ならどこでもやっていける、なにしろモンゴルでも母子暮らしだったのだから。そして私は、どんな環境でもまじめに働いて、いい歯車になれる。そう吹き、クスツと笑う。三月で五十歳。

山内裕子

◆平成十六年に発足をした「昭和九年生まれの歌人の会」の地方研究会を、青森にお住まいの中村キネさんのご尽力で、昨年十月末にもつことができた。中村さんご本人のほか、家族の方々、歌の友人の方々もご一緒に愉しく実りある会と旅であった。その上長勝寺は、会員の須藤まさえさんの嫁ぎ先の寺ということで、懇切なお話を聞きながら拝観させていただいたのであった。

結城文